



中荒井村旧肝煎千葉家文書（百姓、肝煎一安永3年—1774頃は故あって一条をなのる、それに中荒井組郷頭小森与平の添書がある）

安永三年（一七七四）十一月の養子縁組に関する代官所へ提出した文書の写しが旧肝煎宅にあるが、千葉宅は一時一条を名のつたことがあり、丁度その時代がそうであったので、中荒井村は百姓の代表に肝煎一条久左エ門の名がみえ、その添書きに中荒井組郷頭小森與平とあるから、中荒井組の各肝煎を統べる郷頭が、中荒井村にあったことは確かである。

この小森・千葉両宅のこの村に住みつた来由を知りたいが明確なことはわからない。千葉宅の系図書なども見たが、時胤千葉大輔は芦名氏と久縁があり、平田氏の世話になって、芦名家に仕え、荒井村館に住し、千葉寺を建立したとみえている。その逝去が嘉吉二年（一四四二）四月九日、この時代に、既に村が出来ていたことは疑わしくない。むしろ村はそれよりも古く、既に出来ているとも思われる。

現在も館の内という一廓が村中にある。新編風土記によると東西二〇間、南北一町余とある。家には盛衰・興亡が繁くやってくる。肝煎屋敷は現在の館の内にはない。村にも盛衰はあるが家より繁くはない。寛文五年（一六六五）の書上げには家数七九、かまど九九、男二五〇人、女二〇三人とある。家数とか